

北川：西さんはしゃへるときには、重々しくいい意味で観念的なことをしやべる人だと思っていた。だから今回、作るもののが無いといつていて、どうするんだろうと思つたりした。西一作るもののが無いというのは、去年に神奈川の県立近代美術館で個展があり、そこで自分でできる事をしてしまったという事があります。私が初めて8つの頃に初めて訪れた美術に関する建物が神奈川県立近代美術館で、そこの中庭にあるイサム・ノグチの作品の下で撮った写真があるので、そこで初めて学校で習う国画工作でない美術の世界があるんだと言う事を知りました。その頃からの、50年位をかけて作った展覧会だったので、完全にこれでやる事はなし得たという気がしていました。作るものがないということについて最初に考えたのは、高度成長の後に、こなだけものがあふれている時代に何をやつたらいいのかな、と思った時です。それから、

第1回

周亥の行き場

一空家と彫刻家

何を想い、何を考え作品を作ってきたのか
「作るものがない」という真意は？

山を買い、そこに道や畑を作つてきました。それでさらに彫刻というものに自分に関わるところがあるなら、もう一度やろうと思つたのが1980年前後です。数年何も作らず、自分の土地をいじりながら生活してきた事が今に繋がっています。

のバー・テイをやつています。日本は難民に対して、最も冷たい。労働力としては外国の人を必要としているが、重用しない。難民ディスというのが6月にあって、そこにアーティスの手を借りて日本全体で、その日に難民について考える、という事をやりたいと思っています。

西一関連して、何でものを作れなくなつたかというのを考えると、後進国の人たちの事がある。自分を最低限のくらしきしていふ人の

つていけない。こういうことをいろいろ知つていくと、何をやるべきなのか、何をやっていいのか、というのが、何を作つていいのかな、というのに繋がつていいき、そう簡単には作れないなどいう感じがします。それで、今回の展覧会では切るくらいしかできないと思ひ、壁を切りました。そういう姿勢はなかなかつくれないし、ということは一番大きいかもしません。

物があふれた時代に何をやつたら
良いのかと思った



対話の様子

中において、それでも窮
刻を考えられるのかな。
ということを考えてしま
う。わずかな先進国の人
たちによつて多くの後進
国の人人が切られているの
だと思います。最近見た
のが、「ナイロビの蜂」
という映画であつたり、「ダ
ー・ウインの悪夢」であつ
たり、「ホテル・ルワンダ」
であつたりします。「ダ
ー・ウインの悪夢」という

西一長いこと行くこともあります。それで、いつも帰る時に、ヨーロッパからだつたら、アフリカによつてみたり東南アジアによつてみたりします。そこにいつも自分の分身のようなものを埋めてきます。「ナイロビの蜂」という映画を見ても、見ていてそれがどこに埋まっているかということがわかります。その埋まっているものを通して、何年か前のナイロビと今のナイロビが変わっているということや、その上を走り去っていく人の振動を感じたりします。妄想かもしませんけども。

北川フランの「対談」

連続6回シリーズ

わずかな先進国の人たちによつて
多くの後進国の人々が切られてゐる

映画について言えば、食料と一緒に武器を積んでアフリカに運び、その後にビクトリア湖の魚を積んで日本に帰ります。その魚は、ツ族とツチ族の争いの中、湖に放り込まれた人を餌にしているもので、それを日本人は知らずに食べている。僕は東欧の作家の友人が多いんだけど、1990年初頭に開放されたときの余った武器がみんなアフリカに流れていって、紛争を助長している。そういうことが日本において考えないと、自分は美術に向かっていけない。こういうことをいろいろ知つていくと、何をやるべきなのか、何をやっていいのか、というのが、何を作つていいのかな、というのに繋がつていき、そう簡単には作れないなという感じがします。それで、今回の展覧会では切るくらいしかできないと思い、壁を切りました。そういう姿勢はなかなかつくれないし、ということは一番大きいかもしれません。

北川 - 旅行はけつこう長く行かれたりしていらっしゃるのですか。

西 - 長いこと行くこともあります。それで、いつも帰る時に、ヨーロッパからだつたら、アフリカによつてみたり東南アジアによつてみたりします。そこにいつも自分の分身のようなものを埋めてきます。「ナイロビの蜂」という映画を見ても、見ていてそれがどこに埋まっているかということがわかります。その埋まっているものを通して、何年か前のナイロビと今のナイロビが変わっているということや、その上を走り去っていく人の振動を感じたりします。妄想かもしれませんけども。